

地域資源活用に関する高齢者ニーズの考察 ー地域の茶の間利用者のインタビュー調査結果からー

キーワード： 高齢者、ニーズ、買い物、居場所

李 在億
新潟青陵大学

I 目的

本研究は、「白山駅～白山浦（白山市場）～学校町通り」の活性化に必要な当該地区高齢者のニーズを明らかにすることが目的である。当該地区は少子高齢化や地域環境の変化による、コミュニティの衰退、特に商店街の衰退が顕著である。平成 22 年の新潟市中央区における高齢化率 22.8%であり、平成 42 年には 30%を越すと推計されている（新潟市将来推計人口。新潟市福祉部福祉総務課、平成 24 年）。高齢者は自らのニーズを自覚し声を上げることが少なく、社会活動への参加も乏しいことから生活が活性化しにくい。それはすなわち地域活性化を阻む要因ともなり得る。そこで、当該地域の高齢者の日常生活、買い物方法、居場所等に関するニーズに焦点を当て、地域に活性化にかかわる課題を把握する。

II 方法

新潟市中央区の関屋・白山エリアで開催されている「地域の茶の間」のうち 5 か所を訪問し利用者を対象にインタビュー調査を行った。調査期間は平成 25 年 1 月～2 月である。質問項目は、活性化のねらいとしている白山市場および憩いの場の有効活用における高齢者のニーズを把握するために「日常生活状況」「買い物方法」「白山市場の利用頻度」「地域の居場所」とした。倫理的配慮としては、「地域の茶の間」の主催者及び利用者に調査の目的、調査への協力の依頼、また結果を公表することを口頭で説明し、同意を得た。

III 結果

1. 基本属性：「地域の茶の間」（5 か所）を利用している高齢者 28 人（男性 2 人、女性 26 人）であった。年齢別では、60 歳代（10 人）、70 歳代（12 人）、80 歳代（5 人）、90 歳代（1 人）。住居年数は、全員が 20 年以上この地区に住まっていた。家族構成は、一人暮らしは 8 人で、20 人は配偶者や子どもなど家族と一緒に暮らしていた。

2. 「日常生活について」：①「困っていること」は、健康状態の不安が最も多かった。一人暮らしのため病気や怪我をした時の心配、冬の雪かきや移動の心配であった。②「ご近所付き合い」は、挨拶程度が多く、頻繁に交流している、サロンやサークルなどで交流していた。一方周りに家がなくて、交流がない高齢者もいた。③「相談相手」は、家族が最も多く、友人、地域の茶の間の参加者、近所の人であった。④「交通手

段」は、徒歩が最も多く、自転車、バス、車の順であった。

3. 「買い物方法について」：①場所は、近所のスーパーマーケット、ショッピングセンターやデパート、コンビニ、配達サービス、新潟駅等であった。②頻度は、毎日が最も多かった。週に数回が続いた。③品目は、食品が最も多く、次に日常生活用品等であった。④白山市場の利用度及び要望は、市場を利用していないが約半数を占めて、野菜の購入が最も多かった。また一人分の食材の販売、イベントの開催等であった。

4. 「地域の居場所について」：①現在利用中のサロンや地域の茶の間の居場所は、地域の茶の間の 18 人、サロンが 3 人、ボランティア活動場所（老人デイサービスセンター）3 人、習いごとや趣味の教室 2 人、新潟福祉会館、新潟市生涯学習センターであった。②ほしい居場所は、近隣住民とゆったり話ができるスペース、男性が気軽に集まれる場所、地域の茶の間の増設であった。

IV 考察

当該地区高齢者の日常生活、買い物方法、居場所などに関する状況やニーズが明らかになった。それは、健康面の不安、特に独居高齢者の身の回りの世話に関する不安であった。そのため、それを解消できる相談相手や場の提供が必要である。買い物は、地区のスーパーが最も利用されており、家族と同居している高齢者からは深刻な問題は見受けられなかった。しかし、地区の高齢化が進むとともに、独居高齢者が増加している中で、今後買い物支援に関するニーズは増えると予想される。さらに、地域の居場所について地域住民同士がつながりを保つような場の確保が必要であった。

V 結論

高齢者の主なニーズとして、健康相談や親しく他者と交流できる場の確保、白山市場の再生等であった。このニーズへの対応として、現在地区にある空き家、商店街にある空き店舗、高齢者に十分活用されていない地域の憩いの場「ふれあいハウス」を健康相談や集いの場として有効活用できるための対策を検討することが必要である。

参考文献

新潟市中央区社会福祉協議会・新潟県立大学. 新潟市中央区におけるひとり暮らし高齢者の生活と意識に関する調査報告書. 2011. 3:54-85.